

中学校 音楽

創作の活動における思考力・判断力・表現力の育成を目指した指導法の研究
—創作の活動を通して、主体的に音楽活動に取り組む生徒の育成を目指して—

中泊町立中里中学校 教諭 川村 敏広

要 旨

本研究は、音楽科における創作の活動において、自己のイメージと音楽を形づくっている要素とを関わらせながら自由に創作する活動が、思考力・判断力・表現力を育み、今後の音楽活動に主体的に取り組む生徒の育成に有効であることを、実践を通して明らかにしたものである。

主体的に創意工夫しようと試行錯誤を繰り返す活発なグループ活動が行われる中で、イメージしたものを音楽を形づくっている要素と関わらせながら音楽へと構成する能力が高まった。

キーワード：中学校 音楽 創作 音楽を形づくっている要素 言語活動 図形楽譜

I 主題設定の理由

平成20年3月に中学校学習指導要領が告示され、音楽における創作の指導内容がこれまでより焦点化・明確化された。第1学年2内容A表現(3)アでは「言葉や音階などの特徴を感じ取り、表現を工夫して簡単な旋律をつくること」、イでは「表現したいイメージをもち、音素材の特徴を感じ取り、反復、変化、対照などの構成を工夫しながら音楽をつくること」と示されている。本研究で取り上げたものは、主にイの内容となる。

音楽には、表現及び鑑賞の領域があるが、これまで自身が行ってきた授業を振り返ってみると、創作の分野を敬遠してきた経緯がある。教師も生徒も「音楽での創作は作曲すること」と思い込みがちで、創作の活動を行うには、専門的な音楽理論や作曲のための知識が必要と考えられているのが現状である。

自分自身がこれまで行ってきた創作の授業では、リズム聴音や習得したリズムパターンを組み合わせる個人による創作の活動を行ってきた。本研究では、一つのテーマを共有しグループで創作の活動を行い、その活動の中で試行錯誤を繰り返し創意工夫することが作品の質を高め、仲間と協同の喜びを実感できる創作の活動につながるのではないかと考えた。

また、音色・音の重なり・強弱・構成を基軸として各領域との関連を図った題材構成を行い、自分のイメージしたものを音素材や音楽で表現する創作の活動と、創作の活動で知覚・感受した音楽を形づくっている要素を関わらせながら鑑賞する活動が、今後の音楽活動に主体的に取り組む生徒の育成に有効ではないかと考え、本主題を設定した。

II 研究目標

音楽科における創作の活動において、自己のイメージと音楽を形づくっている要素とを関わらせながら、自由に創作する活動を通して、思考力・判断力・表現力を育み、音や音楽に対しての感性を豊かにすることが、今後の音楽活動に主体的に取り組む生徒の育成に有効であることを、実践を通して明らかにする。

III 研究仮説

テーマから自由な発想でイメージしたものを表現する創作のグループ活動が、試行錯誤を繰り返し創意工夫する中で生徒個人とグループの思考力・判断力を育み、表現力を高めることができるであろう。また、創作の活動で知覚・感受したことが音や音楽に対しての感性を豊かにし、今後の音楽活動全体に主体的に取り組む生徒の育成に有効であろう。

IV 研究の実際とその考察

1 研究内容

(1) 創作の活動に関する現状の把握

創作の活動に対する生徒の意識について事前調査を行った。調査対象は、中里中学校第1学年63名である。その結果が図1で、大半の生徒が苦手意識をもって消極的な意識を抱いていることが分かった。

苦手としている主な理由として、「音符を操作することが難しそう」「何を書けばいいのかイメージがわからない」「音楽をつくることに自信がない」「音楽をつくったことがない」「音を組み合わせることが難しい」などの理由が挙げられた。

このことから、グループでの創作の活動を行う必要があると考えた。

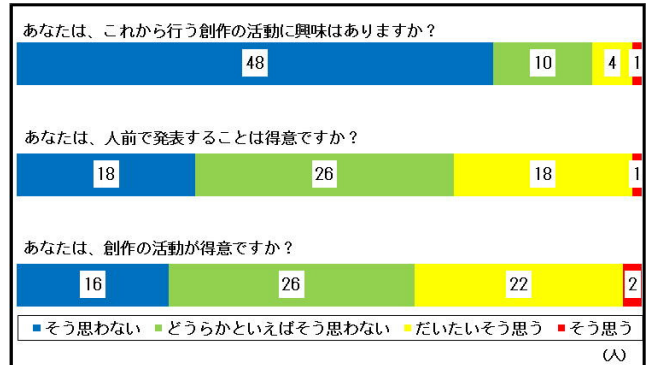


図1 創作の活動に関する事前アンケート

(2) 題材計画の見直しと留意点

次の四つの点に的を絞り、図2で示す題材計画を作成した。

- ・ 題材全体の構成と、題材の評価計画が一目で分かるもの。
- ・ 5分単位で授業の流れを把握でき、見通しをもって授業を進めることができるもの。
- ・ 箇条書で書くことができ、手軽に毎時間の授業に活用できるもの。
- ・ 授業実施後の改善点を記入する欄を設け、次回へつなげることができるもの。

いろいろな音を見つけて、イメージしたものを音楽で表現しよう													
時間構成	1時間目		2時間目		3時間目		4時間目		5時間目		授業後の改善点		
本時の内容	音楽教材や楽器の音色に関心をもち、テーマからイメージした音楽の創作をしよう。		自分で表現したい音楽を簡単な図形楽譜として描き表してみよう。		テーマからストーリーを決め、ストーリーに合った音の形や音の重なりを考え、グループで工夫して演奏表現してみよう。		各グループで創作したストーリーを、演奏で発表しよう。		イメージを膨らませながら鑑賞し、CDジャケットを作ってみよう。				
授業の流れ	0分	学習活動	評価場面 具体的評価規準	学習活動	評価場面 具体的評価規準	学習活動	評価場面 具体的評価規準	学習活動	評価場面 具体的評価規準	学習活動	評価場面 具体的評価規準		
	5分	手作り楽器の音を聞き、素材などを知る		個人で楽器の選定をする		グループで全体の構成を考える		スコアをもとに、グループで練習する		前時の感想の一覧を見る	<ul style="list-style-type: none"> ・ 楽器の音色や音楽教材を味わう時間設定が不十分だった。 ・ 生徒に提示した図形楽譜の資料によって、生徒のイメージが固定化してしまかなか書けなかった生徒もいたため、次回は提示の仕方を工夫したい。 ・ 鑑賞の具体的評価規準をより焦点化したしたい。 		
	10分	グループで「水」「火」「森」のテーマを決める		個人で30秒程度のストーリー、流れ、構成を考える		①ストーリーを考える	音楽を構成する創意工夫						
	15分	選択したテーマから、イメージを膨らませる		図形楽譜を提示し、描き方を教える		②「入り」「終わり」のタイミングを決める	グループ活動での話し合い活動の様子を観察						ラヴェル作曲「水の戯れ」を鑑賞する
	20分	イメージした特徴から、オノマトペを用いて質感を考える	WS記入内容	図形楽譜を描く(自分で表現するパートのみ記入する)	図形楽譜を描くことができる(WS評価)	③個人で表現を工夫する		グループごとに演奏を発表(他グループは感想を記入)	発表風景観察	④鑑賞した音楽からイメージした曲名を考える			CDジャケットを作る
	25分	質感を表現するためにふさわしい手作り楽器を選択する	楽器選定理由			④楽譜に記す(個人)				⑤鑑賞した音楽からイメージを絵で表現する			
	30分	イメージした特徴を手作り楽器に反映させる	活動場面の観察評価(音色・奏法の工夫、探求)	音の形を使って音の重なりを体験する		⑤個人で描いた楽譜を切り取りスコアにする	グループ活動での練習の様子を観察			⑥鑑賞した音楽の変化や特徴を理解し紹介文で表現する			
	35分	手作り楽器に触れ、イメージした質感を楽器で表現する				グループで試行錯誤を重ね演奏を練習する	グループ活動での話し合いの様子を観察						
	40分							感想発表とワークシート記入	感想発表とワークシート	完成した作品を紹介する			
	45分									CDジャケットを完成させ提出する			完成したCDジャケットを評価
50分													
音楽への関心・意欲・態度	オノマトペを用い、テーマからイメージした音の質感を感じ取り、表現を工夫しながら音楽をつくる学習に、主体的に取り組もうとしている。												
音楽表現の創意工夫	音色・音の重なり・強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特徴や雰囲気を感じながら、イメージしたことを音楽教材の特徴を感じ取って構成を工夫している。												
音楽表現の技能	音色・音の重なり・強弱・構成を生かした音楽表現するために必要な図形楽譜を描き表すことができる。												
鑑賞の能力	音色・音の重なり・強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特徴や雰囲気を感じながら、音楽を形づくっている要素や構成との関わりを感じ取って解釈し価値を考え、絵や紹介文で説明し、音楽の良さや美しさを味わっている。												
音楽を形づくっている要素 [音色・音の重なり・強弱・構成]													

図2 本研究で用いた題材計画(シート形式)

また、本題材計画における留意点は以下のとおりである。

- ・音楽理論にとらわれず、テーマから自由な発想でイメージしたことを表現できる活動を設定する。
- ・生徒が主体的に音楽表現を創意工夫することができる活動を設定する。
- ・音楽を形づくっている要素である音色・音の重なり・強弱・構成を基軸として、表現と鑑賞をつなぐ題材構成とする。

(3) 事前準備活動

まず始めに教師の準備として、実践事例や手作り楽器の書籍や資料を参考にして、様々な手作り楽器を製作した。用いた素材は、貝や木の実などの自然のものや、身の回りにある身近なものを基本とした。

次に生徒の準備として、どんな手作り楽器を制作するかについて考えた。その手だてとして、手作り楽器の音色を知覚・感受することから始めた。目を閉じた状態で手作り楽器の音色を聴き、楽器の素材が何であるかを考えた。また、手作り楽器の音色を聴き、音色からどのような場面が想像できるかイメージを深めた。その後、たくさん手作り楽器に触れ、音色のよさを知覚・感受し興味・関心・意欲を高めた。

2週間後の創作の活動の授業に向けて、身近なもので手作り楽器を作ってくるよう指示した。個人の思いや意図が詰まった手作り楽器がたくさん集まった。自分で作った手作り楽器に納得がいけないのか何度も作り直してくる生徒や、他の人が作った手作り楽器の良さを認め改良を重ねてくる生徒、一つに限らず複数の手作り楽器を作ってくるなど手作り楽器に興味・関心を示し、これから行う創作の活動に意欲の高い生徒がたくさん見られた。特に日ごろの音楽の授業で目立たない生徒が意欲的に取り組んでいた。

(4) 効果的な資料の精選

テーマから自由な発想でイメージしたものを表現する創作のグループ活動を行うに当たり、表に示す活動を支えるための資料を用意した。また、これまでの事前アンケートの結果から創作の活動で苦手意識をもっている生徒や手だてが必要な生徒への支援策として、イメージを広げることに有効であると思われる補助的な資料の精選を行った。

表 生徒の活動を支えるための資料

資料名	内容・目的
「森」「水」「火」の写真	三つのテーマに関係する場面の写真をそれぞれ5枚用意した。生徒がテーマから自由な発想で具体的な場면을想像する際に、イメージを広げるための補助資料として用いた。
「エア焼き肉」の映像	一つの場面が時間の経過とともに状態が変化し、それに合わせて音の質感や音の強弱も変化するということを知覚・感受するための補助資料。生徒の興味・関心を高めるために、本題材では焼き肉の映像を用いた。
「オノマトペ」の歌の映像	オノマトペ（擬音語・擬態語）だけを並べた歌。1番は歌にオノマトペの文字のみが画面に現れ、2番では1番の歌とオノマトペの文字に絵が加わりどんな動きがオノマトペで表現されているかを理解する手だてとなった。
「図形楽譜」の画像	生徒はこれまで図形楽譜を見たことがないため、たくさんの種類の図形楽譜を用意した。イメージしたものを自由に図形楽譜として記譜するための補助資料。強弱の変化を図形で表現しているものが多い。
「動く図形楽譜」の映像	上記図形楽譜の補助資料に加え、生徒の図形楽譜に対するイメージをより柔軟にするための資料。実物の楽器の形状を図にしたものやイメージを絵や記号で描かれているものが多い。
「NHK・スコラ」の映像	生徒は、音の入りや終わりのタイミングを見計らって「音の重なり」を自由に表現することを苦手としていた。ガムランの演奏場面を見せたことで、「自由に入る・終わること」への手掛かりとなりその後の演奏に役立った。

(5) オノマトペについて

オノマトペ（Onomatopoeia）とは仏語で擬音語や擬声語のこと。広辞苑では「物の音響、音声などを真似て作った語」と記されている。

オノマトペは音の質感を表現する手段として重要な役割を果たしている。私たちは日常会話の中で自然にオノマトペを用い音の特徴や概念を一般的な形容詞や擬音語で表現している。音の特徴を表現する手段としてオノマトペは分かりやすい。本研究では、テーマからイメージした場面と手作り楽器の音色とを結びつける思考判断する場面で、音の質感や変化を言葉や文字で表現するためにオノマトペを用いた。

2 授業の実践と検証

10月下旬から5回にわたり検証授業を行った。

1時間目は、グループで「森」「水」「火」の三つのテーマから一つに決め、選んだテーマから個人で具体的な場面をイメージした。生徒はワークシート（以下WS）に、テーマからイメージした場面を、オノマトペを用い、音の質感を言葉や文字で表現した。個人でイメージした具体的な場面を持ち寄り、グループでマッピングシートを用いて一つのテーマから幾つかの異なる場面にまとめた。また、イメージした具体的な場面を手作り楽器で演奏表現するために工夫する点考えた。

生徒は、テーマから自由な発想で具体的な場面をイメージし、思いや意図を明確にもって場面にふさわしい音素材を探究する活動を主体的に行った。生徒の中には図3のように、音の質感や音の強弱を、オノマトペを用いて文字の大きさや濃淡で表現する工夫が見られた。

2時間目は、個人でテーマからイメージした具体的な場面を図形楽譜として描き表した。次に、グループで音の重なりを試行錯誤しながら演奏で表現した。

生徒は図形楽譜を描き表す際に、時間的な流れと変化について理解するために、短いストーリーを考えた。ストーリーの変化とともに、音の質感や音の強弱を変化させるなどの工夫が見られた。完成した生徒の作品の中には、図4のように、音の入りと終わりのタイミングが一目で分かるものや、オノマトペと関わらせながら図形楽譜を描いた作品があった。

グループで音の重なりを表現する活動では、個人で意思で音の入りと終わりのタイミングを決めるため、試行錯誤しながら表現していた。生徒たちは自由に入りや終わりのタイミングを見計らって演奏する経験がないため、自信をもてず不安げにグループ活動を行っていた。

そこで、周囲の音を聴きながら、自由なタイミングで入り、音の重なりを楽しみ、自由なタイミングで終わるといふ、インドネシアの伝統的な音楽「ガムラン」の映像を見せた。この映像を見せる前は不安げに演奏していたグループが、自由に音の重なりを表現できるようになった。

3時間目は、グループで考えたストーリーに、イメージした音を重ね、音から音楽へと構成していく活動を行った。始めに個人で描いた図形楽譜を持ち寄り、図5のようなスコア（総譜）をつくった。スコアは、演奏する際の音の入りと終わりのタイミング、強弱などの表現を工夫する点が目で見分かるため、演奏する際の手だてとなった。

生徒はイメージした具体的な場面を表現するために、ふさわしい楽器の選定、音色・強弱・奏法の工夫、具体的な場面や時間的な流れの再構成などを行った。創意工夫し試行錯誤を繰り返すグループ活動が、生徒の思考力・判断力・表現力を高めていった。

4時間目は、グループごとに演奏を発表した。演奏直前に設定した最終練習では、音の入りや終わりのタイミングを合わせることに余念のないグループや、音色の工夫や強弱の変化に磨きをかけるグループの活動の様子が見られた。各グループが約30秒の発表時間で演奏した。発表するグループはリーダーがテーマを言

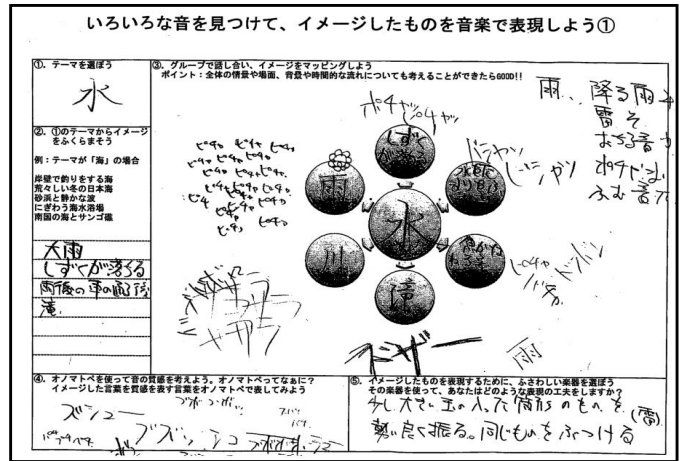


図3 オノマトペやマッピングで表現した生徒のWS

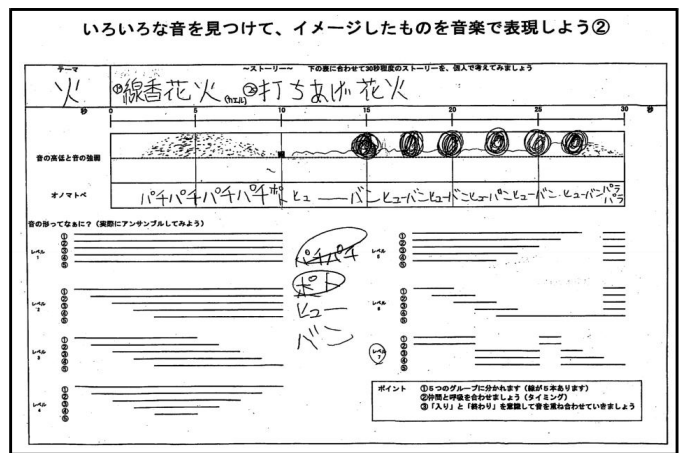


図4 図形楽譜を具体的な絵で表現した生徒のWS

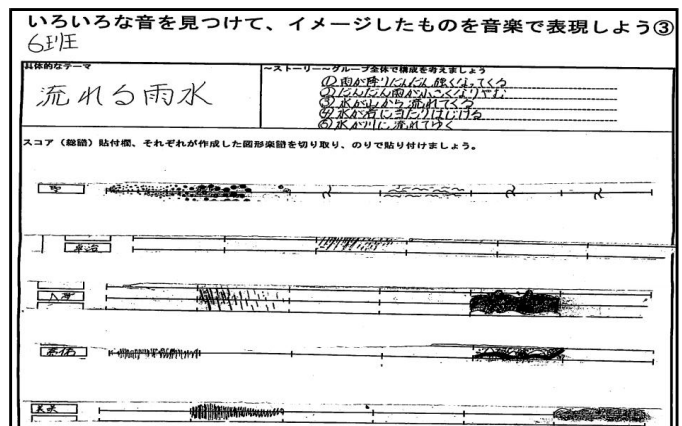


図5 グループで図形楽譜をスコアにまとめたWS

ってから演奏を発表した。あらかじめ生徒全員に各グループのスコアを印刷し配付した。配付したスコアに発表したグループの良かった点を書き、互いに交換し読みあうことでそれぞれの励みとなった。

これまで人前で演奏することに消極的だった生徒が、思いや意図を明確にもつことで主体的に取り組む姿へと変化した。個人で表現することに苦手意識のあった生徒が、グループ活動では協力して練習や活動に取り組む積極的に発表していた。また、テーマのイメージを音楽で上手に演奏表現し、聴いている生徒にイメージと音楽をしっかりと伝えたグループもあり、音楽の空間を共有できた場面も見られた。

5時間目は、創作の活動で知覚・感受した音楽を形づくっている要素（音色・構成・強弱・音の重なり）を生かして「CDジャケットを作ってみよう」と題した鑑賞の授業を行った。

鑑賞教材は、ラヴェル作曲「水の戯れ」を使用した。生徒には曲名を伝えず、これまでの創作の活動で学習したことを生かし、音楽を形づくっている要素を楽曲と関わらせながら鑑賞することを伝えた。

生徒は、鑑賞した音楽の変化や特徴を知覚・感受しながら曲名を考え、イメージしたことを絵で表現し、音楽のよさや美しさなどについて、文章で相手に伝える紹介文を書いた。紹介文を書く際に、文章で表現することを苦手としている生徒へ

の手だてとして、空欄部分を埋めることで紹介文に書き表すことができるWSを配布した。図6は、鑑賞した楽曲の特徴を感じ取り、川から海へ水が流れる様子について絵や紹介文で表現したWSの一例である。

これまで自身が行ってきた鑑賞は、教科書にある教材を、楽曲のもつ特徴や背景、作曲者について教師が解説し感想を書かせる授業が多かった。しかし、本研究における鑑賞では、創作の活動で音楽を形づくっている要素である音色・音の重なり・強弱・構成と関わらせた鑑賞教材を用意したことで、思いや意図をもって絵や紹介文で表現できる生徒が増えた。

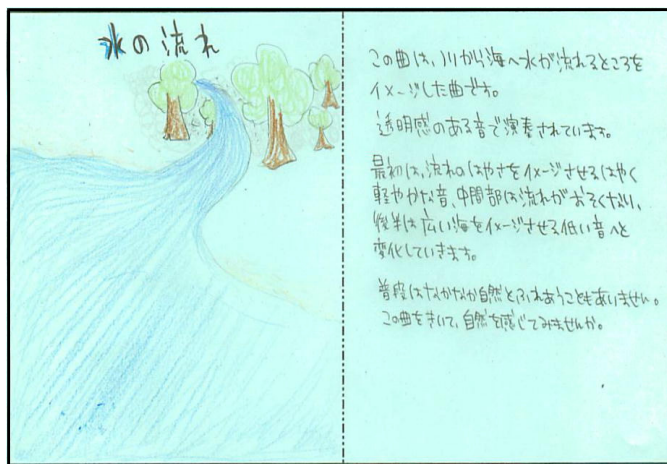


図6 楽曲の特徴やよさを絵や文で表現したWS

3 授業後の実態調査から見る検証

事前と事後に行ったアンケート結果との比較を示したものが図7である。いずれの質問においても、事前に「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」と消極的な回答だった生徒の数が減少し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」に転じていることがグラフから読み取れる。また、本題材で身に付いたことや生徒のつまずきを把握するために、質問紙を用いて次の六つの質問を行った。

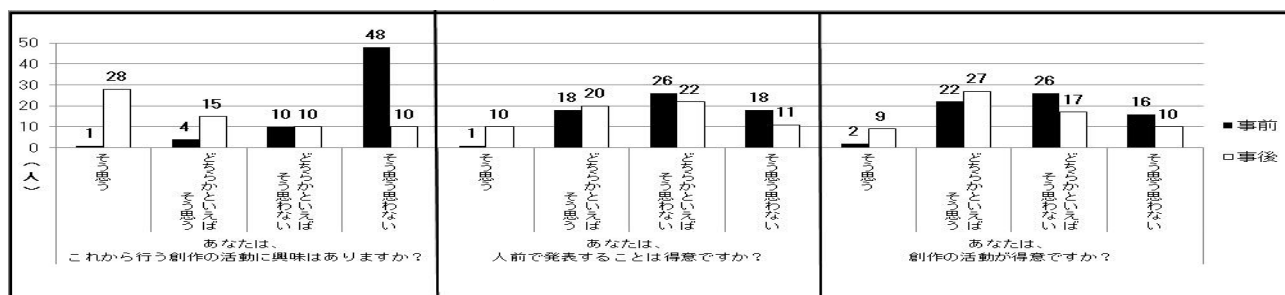


図7 創作の活動に関する事前アンケートと事後アンケートの比較

① 「図形楽譜を書く際に工夫したことは何ですか」

「長さを図形で表した」「音のイメージを絵にした」「音の強弱を濃淡で書いた」「型にはまらず、いろいろな絵を描いた」「誰も思いつかない図形で書こうとした」などの回答があり、生徒は初めて行う図形楽譜を描くことに興味をもち、創意工夫しながら取り組んでいたことや、音楽を形づくっている要素である強弱などを 知覚・感受し図形楽譜を描くことができたことが分かった。

② 「グループで演奏する際にどのような工夫をしましたか」

「音の強弱」「息を合わせる」「一人一人の演奏時間を長くした」「全員が違う音色になるように楽器選びを工夫した」「入るタイミングと終わるタイミングを工夫して演奏した」「自分たちがつくったこだわりの楽器で演奏する喜びがあった」などの回答から、グループ活動が個人の活動では体験できない

効果を生み、思考・判断したことを表現へとつなげていたことが分かった。

③「演奏や表現にはどのような工夫や変化が必要だと思いますか」

「リズム」「強弱」「速度」「本物に近い音を出す」「聞く人も楽しめるような工夫」「入るタイミングと終わるタイミング」「恥ずかしがらないで演奏する」などの回答があった。手作り楽器が生み出す音色に工夫しようとする回答や、音の重なりを工夫しようとする回答が多く見られた。生徒が主体的に創意工夫し、よりよい表現を試行錯誤する活動が楽しさや充実感につながったものと考えられる。

④「創作の活動で苦労したことや難しかったことは何ですか」

「テーマやイメージに合う楽器を選ぶこと」「みんなの意見をまとめ、心を一つにして演奏すること」「自分の作ってきた楽器では出せない音があること」などの回答が多かった。短期間で限られた素材で手作り楽器を制作したこと、制作した後にストーリーや表現を創意工夫したため音色の広がりには限界があったこと、グループ活動を展開する中で意見をまとめ一つの作品をつくりあげる苦労が、このような回答につながったものと考えられる。これらの回答を踏まえ、今後の指導の改善につなげていきたい。

⑤「楽譜はなぜ必要だと思いますか」

「楽譜は後世に残すものである」「いつだれとでも同じ演奏ができる」「入るタイミングや終わるタイミングがよく分かる」「楽譜がなくても自由に演奏はできるが、楽譜があれば強弱や表情の変化に注意して演奏することができる」など楽譜の必要性について認識している記述が多かった。このことは、これまで楽譜を意識せずに見ていた生徒が、これからの音楽活動で楽譜を注意深く見ることにつながり、器楽や歌唱の分野においても主体的な音楽表現ができる生徒の育成につながるものと考えられる。

⑥「あなたが考える創作の活動とは何ですか」

「グループで話し合いながら、協力して芸術作品をつくること」「みんなで協力し合い、よりよい演奏を奏でるもの」「リズムや強弱や速さをグループで工夫し、未知の音楽体験をすること」という回答があった。グループ活動を通して、協同の喜びを実感できる創作の活動というねらいを、これらの活動を通して生徒が十分に感じていたことが分かった。

V 研究のまとめ

生徒が、テーマから自由な発想でイメージしたものを表現する創作のグループ活動が、思いや意図をもって手作り楽器などの音素材を探究することで思考に関する力を育んだ。また、創意工夫し音を重ね合わせていく体験を通して、よりよいものをつくろうと試行錯誤を繰り返したことが、主体的で創造的なグループ活動へとつながった。その結果グループ活動を通して協同の喜びを体験できる創作の活動が行われ、思考力・判断力・表現力が育まれ、主体的に音楽活動に取り組む生徒の育成につながった。

VI 本研究における課題

創作の活動を音楽科の他の分野に効果的につながる題材構成を研究する必要がある。また、創作の指導事項ア・イをバランスよくつなげ、中学校3年間を見通した創作の活動の指導計画が必要である。

また、生徒がつくった音楽にしっかりと耳を傾け、教師が生徒の思いや意図を理解しながら価値付けることの大切さを実感した。今後、生徒が表現しようとするものに共感する教師側の柔軟性や、感性の豊かさを更に高めていく必要がある。

<引用文献>

文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 音楽編（平成20年9月）』, p. 82

<参考文献>

ヨイサの会（横川雅之・池田邦太郎・斉藤明子） 2001「授業にすぐ役立つ！「音」を「楽」しむ『音楽の旅』「聴く」「つくる」で心を育てる」 音楽之友社出版

<参考URL>

国立教育政策研究所 「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 音楽）」
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyoukahouhou/chuu/0205_h_ongaku.pdf (2011. 12. 28)